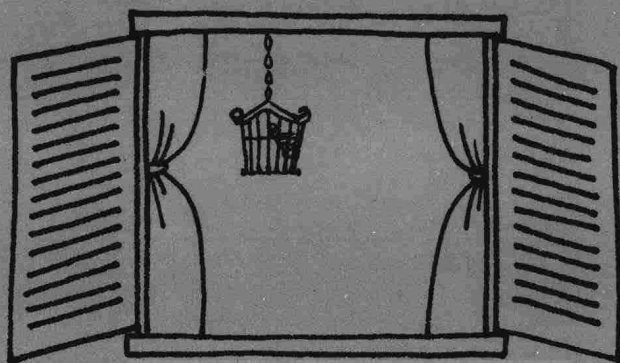


樂天夫人

中野実



人 夫 天 樂



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十二年二月二十日発行

定価三九〇円

著 作 者

中

野

実

発 行 者

石

渡

磨

須

子

製 版 者

内

田

柳

次

郎

発 行 所

東

方

社

東京都文京区目白台一丁目七番一六号

振替東京五七七四番
電話(九三)四四五一四番

(印刷・邦文堂印刷所)

長篇小說

樂天夫人

中野實

ユーモア
長篇小説

樂天夫人

アルバイト・・・・・・・・・・	五
夫婦のコース・・・・・・・・・・	六
結婚記念日・・・・・・・・・・	三〇
一難去つて・・・・・・・・・・	四
記念寫真・・・・・・・・・・	七
一日だけの旦那様・・・・・・・・	七
日曜日は厄日・・・・・・・・・・	八
競輪場事件・・・・・・・・・・	九
風船令嬢・・・・・・・・・・	二〇
戀愛スタイル・ブック・・・・・・・・	二二

女のステップ	一四
嫉妬競争	一四
ラヴ・レター	一六
新 潟 行	一四
南 極 北 極	一七
愉しからずや	二〇
椿 事	二三
迷 路	二三
離 婚 結 婚	二六
友 か へ る	二五
九 官 鳥	二四
戀愛 A B 型	二七

装
幀

吉

田

誠

アルバイト

一

「では、お次の方、どうぞ。」

司會のアナウンサーにうながされて回答者のマイクrophonの前に立ったのは、茶色のスーツに、純白のブラウスをのぞかせたうら若い女性。ステージのプログラムはお馴染みの「私は誰でせう」である。

「お名前はなんと仰有います？」

「坂口ミドリです。」

「坂口さんでございますね。なにをお答へになりますか。」

「歴史上の人物。」

「あゝ、さうですか。お客へになります坂口さんは、背の高い、まだお若い近代的な感じのなごる御婦人でいらっしやいます。では、左から三番目の箱からどうぞ。」

臆する色もなく、彼女が箱から一枚の封筒を抜いてわたすと、

「では、歴史上の人物。坂口さんがお客へになります問題は、東京都澁谷區榮通り三番地古橋庄治さんからの出題で、第一ヒント、わたくしは、藤原時代式部丞藤原爲時の娘として生まれました。わたくしは……」

と、アナウンサーが第一ヒントを繰りかへさうとする瞬間、聞髪を容れず、

「紫式部。」

「さう。紫式部。」

アナウンサーの感嘆の聲といっしょに満堂割れんばかりの拍手喝采。

「坂口さんは見事に第一ヒントでお當てになりました。紫式部にはどういふ著作があるか、御存じでいらっしやいますね。」

「源氏物語です。」

「さうですね。坂口さんは國史とか國文學に大層御趣味がおありのやうですが。」

「いえ、別に……」

「坂口さんは大へん謙遜していらっしゃいます。紫式部は源氏物語で、光源氏という人物を主人公にして、當時の宮廷生活を描寫したと云はれて居りますが、紫式部その人はどういう女性だったものでせう？」

「作品の内容と作者の私生活とは別だと思ひます。源氏物語には當時の貴族階級の愛慾描寫がありますけれど、未亡人になってから、たしか、藤原道長の誘惑なんかもしりぞけて、一生文筆にたづさわったといふ風に記憶してゐますわ。」

「その通りです。才氣渾發、江口さんは紫式部の再來……」

「あら、わたくし未亡人ぢやありませんわ。」

「これは失禮いたしました。どうも、ありがたうございました。賞金をどうぞ。」

にっこり笑った印象的な坂口ミドリは片えくぼの前にその夜初めての第一ヒント回答者の賞金がさし出された。

「坂ちゃん。」

スタジオから廊下へ出たとたん、いきなりミドリに飛びついて来た、セーターにベレー帽の若い女性があった。

「あら。紅子。」

と、ミドリも相手呼びすてにして、

「しばらくね。」

「しばらくはいゝけど、凄いやあないの。」

「なにが。」

「第一ヒントでズバリ。」

「あら、聞いてたの。」

「これよ。」

紅子は肩から下げた大きな革靴をたたいてみせた。

「なに？ 寫眞屋さんみたい。」

「その寫眞屋よ。」

紅子、姓は小野。ミドリとは新制高校からの仲よしグループで、大東女子大の卒業生。父親が寫眞機商、門前の小僧習はぬ經を誦むのたとへか、あつぱれ専門家にもひけをとらぬ寫眞技術をおぼえて今は「フォト・アーチスト」社に籍をおいてゐる。

「雑誌社の注文で、スタジオ風景を撮りに來たら、坂ちゃんが舞臺にゐたんでおどろいちゃった。」

「アルバイトよ。」

「アルバイト……」

「坂口の出張中は、もっぱらアルバイトで赤字予算の埋め合はせよ。」

「まあ、坂口さんはやっぱり岩間組に？」

「ええ。相變らず覗きめがねで地球を割ってあるいてゐるわ。」

ミドリの良人坂口今朝彌は、土建業岩間組に勤めてゐる測量技師。結婚してまだ一年足らずだが、このところ、岩間組請負のグム建設や無電臺の設備やらで地方出張が多い。

「アルバイトはいゝけど、材木屋の地震で旦那さまは氣(木)がもめるでせうね。」

「大丈夫よ。そこは商賣で、あたしといふ人間をちゃんと測量してゐるから。」

「いふわねえ。」

ミドリは笑つて、

「ところで、紅子の結婚問題はどうなったの。」

「目下物色中。」

「をばさまのいつていらしやうた候補者といふのは？」

「氣に入らないから壊しちゃった。」

「結婚レジスタンスね。あたしがおごるわ。銀座へ行かない？」

「賞金がいゝの見たから、たかるかな。」

「あんなことをいつてゐる。」

それから、二人は銀座へお茶をのみに出た。銀座の舗道は春の宵をむさぼるやうなそゞろ歩きの銀ブラ連の流れであふれてゐた。

「ねえ。」

「え。」

「なんかほかにあたしに出来るようなアルバイトない？」

「一發で二千圓なんてアルバイトなんかないわよ。」

「だから、なんでもいゝのよ。わが家の赤字會計も會計だけど、はやく間借りなんかよして、小さくてもいゝから、家を一軒持ちたいのよ。涙ぐましいでしょ。」

「アルバイトね。ないことないけどどうかな。」

と、紅子が首をひねった。

「どうかなって？」

「いえ、實はあたしもこれはアルバイトなんだけど、東京ニュースから頼まれてる仕事があるの。」

「どんな仕事？ あんたとなら喜んでやるわよ。」

とミドリは乗り出したが、

「といつても、ストリップや裸體寫眞のモデルは願ひ下げよ。」

「まさか。」

と、紅子は斜に睨んで、

「ほら、最近よく新聞や雑誌に出てゐるでしょう。東北地方の家出娘が上野驛に着いたら、ボン引がうまいことをいって、特殊喫茶とかいふあやしげなところへ賣り飛ばしたりする話。」

「東京の生態。」

「さう。それを撮ってくれてたのまれて、二、三日上野驛でがんばったんだけど、さういふときはまた生憎なもので、なかなかモデルが見つからないのよ。」

「あたしにその家出娘になれていふの。」

「あなたのやうな美人が上野驛でうろうろしてゐれば、ボン引の方からひつかゝってくるわよ、きつと。それから、インチキな宿屋へひっぱり込まれるところまでうつさせてくれれば、アルバイト料は山分けにするわ。あんたスリラー映画のファンぢやあないの。」

「へんなこと云はないでよ。」

と二の足を踏みながらも、ミドリ心が動いたと見てとったか、紅子はもう一おしとばかり、
「ねえ、やってよ。あんた、学校の演劇部のスターだったんぢやあないの。それにこの企画は單に獵

奇趣味でなくて都會を憧れて家出してくる若い地方の女性に警告する社會的意義もあるのよ。」

「大きく出たわね。いゝわ。やつてみるわ。」

そのとき、喫茶店ドリームの扉をあけてはいって來たロイド眼鏡の青年が、ミドリの姿に目をとめると、やゝしばらくためらつてゐたが、思いきつたやうに二人のテーブルへ近づいて來た。

四

「失禮します。」

とロイド眼鏡はもじ／＼しながら、

「僕、古橋です。」

「古橋さん……」

「古橋庄治です。失禮します。」

と云ひつゝ、古橋と名乗るその青年は紅子の横へ腰を下してしまった。ミドリはいさゝか呆氣にとられて、紅子と顔を見合はせながら、

「どちらの古橋さんでしたかしら。」

「澁谷の古橋です。」

と云はれても、ミドリはと思ひ出せず、

「誰方かとお間違ひになっているんぢやありません？」

「いえ、あなた、坂口ミドリさんでしょう。」

「はあ、さうです。」

「では、かうして紅茶を一ぱい御馳走になるのも宿命です。」

「宿命……」

「お忘れですか、私は誰でせう。」

そのとたん、

「あら。」

「紫式部の出題者です。」

「まあ、大へん失禮を。」

「いや、いや。あなたのやうな麗人が僕の出題にお答へくだすったことは實に光榮です。麗人であるばかりでなく、才媛といふ言葉は、あなたのやうな人にこそ贈られるべきだと思ひました。」